



子どもたちと育てる 地域ぐるみの防災力



三重県玉城町防災ボランティア
代表 松山 稔

1 はじめに

三重県玉城町で活動する私たち玉城町防災ボランティアは、東日本大震災や東紀州の大水害を契機に平成24年に発足しました。令和7年で14年目を迎えます。地域に根差した防災活動を継続しており、令和3年度奨励賞、令和4年度特別賞、令和5年度みえの防災大賞を受賞するなど、その実践は高く評価されています。

2 子どもたちと考える 防災の第一歩

玉城町は平成29年の水害以前、大きな災害が少なく、防災意識は必ずしも高い状況ではありませんでした。特に子どもたちの防災体験の機会が少ないことは大きな課題であり、「災害時に自分たちはどう行動すればよいのか」を主体的に考える場づくりが課題でした。そこで私たちは、町内4小学校と1中学校を対象に、防災教育と体験活動を柱とした取り組みを推進してきました。

3 学びを深める実践プログラム

活動の始まりは、発足直後に実施した小学校の親子行事での防災体験でした。平成26年以降は授業の一環として定着し、ポリエチレン袋を使ったポリ袋炊飯や、卵の殻を割れたガラスに見立てた卵の殻踏み体験（現在は卵アレルギーへの配慮としてペットボトルのキャップも使用）、新聞紙スリッパ作り、風呂敷リュックやロープワ

クなど、身近な材料を活用した実践的内容を展開しています。さらに、子どもたちと一緒に町内を歩くタウンウォッチングや防災マップ作りを行うことで、地域の危険箇所や避難経路を自ら確認する力を育てています。



風呂敷リュックを背負いながら
ペットボトルキャップ踏みを行う児童

コロナ禍では活動が制限されましたが、玉城町役場総務防災課と連携し、防災備蓄倉庫の見学や簡易トイレの組み立て体験を導入しました。普段は中身を見る機会が少ない防災備蓄倉庫を実際に見学し、災害時に小学校が避難所となった場合、子どもたち自身が避難者に使い方を伝えるなど主体的に関わる力を育てています。

4 体験してこそ見える 避難所のリアル

避難所運営を模擬体験できる「玉城町版HUG（避難所運営ゲーム）」も独自に開発しました。カード枚数も精選し、人物イラストや町内の地名・職業を反映し、小学生にも理解しやすい内容にしました。令和2



総務防災課による防災備蓄倉庫の見学

年度に教職員向けに実施した後、令和3年度からは町内の小学6年生を対象に、令和6年度からは小学5年生にも展開しています。また、小学生だけでなく、中学校の先生方、地域のボランティア団体、消防団、特別支援学校とも連携し、活用を広げています。地域外の災害ボランティア養成講座や4県連携自主防災組織交流大会でも玉城町版HUGの実施や発表を行い、他の団体との意見交換や交流を通じて活動の幅を広げています。



避難所運営ゲーム

平成28年からは、日帰り防災キャンプに加えて、避難所宿泊体験も実施しています。段ボールテント作り、防災クッキング、水消火器訓練、一斗缶トイレ作りなどを体験し、実際の避難生活の厳しさを体感します。令和5年度には真冬・暖房なしで実施し、参加した子どもたちは「寒くて眠

れなかったけど、避難生活の大変さを実感できた」と話し、大人からも「室内でも冷えがすごく、実際の避難生活を知る貴重な体験になった」と多くの感想が寄せられました。こうした体験活動は、防災意識を深めるだけでなく、地域での協力や助け合いの大切さを学ぶ場にもなっています。

5 あの日を忘れない 災害の継承

平成29年の台風21号では、町内で最大150cmの床上浸水が発生し、甚大な被害がありました。この記憶を風化させないため、被害記録等をアンケートとして残し、防災モデルルームに浸水線を入れて再現しました。さらに、令和5年度からはシールアンケートで住民の防災備蓄状況を可視化し、備蓄意識の向上に取り組んでいます。

災害ボランティアとしての技術向上にも力を入れ、養生シート張り、屋根の応急処置、床下作業、ブルーシート張りなどの講座に参加し、実践力を高めています。また、多言語対応マニュアルや避難所行動マニュアル「みんなの避難所」を作成し、避難者目線での誰もが安心できる避難所運営が行えるよう支援しています。

6 これからも 地域とともに育てる防災の力

今後も、小学4・5年生での体験学習、6年生でのHUG、中学生への防災講座を継続し、キッズ防災ボランティアやファミリー防災サポーターの育成にも力を入れていきたいと思っています。子どもから家庭、家庭から地域、地域から玉城町全体へと防災意識を広げ、町全体の防災力向上を目指しています。地域と共に歩みながら、未来を担う子どもたちへ防災の大切さを伝え続けていきます。